

企画展紹介

吉野作造生誕百三十年 没後七十五年記念企画展

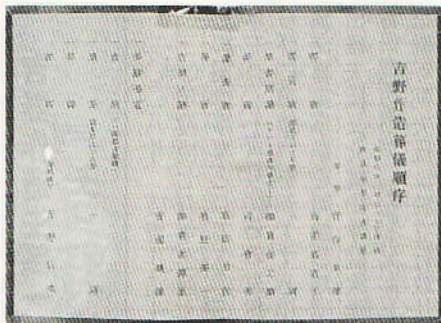
「現代に生きる吉野作造」

二〇〇九年一月十七日～三月二十九日

一九三三年（昭和八）三月十八日、吉野作造は五五歳でこの世を去りました。それから七十五年。今回の企画展「現代に生きる吉野作造」では、吉野作造の死とその後に焦点をあて、吉野の活動を受け継ぐ人びと、東京や故郷古川における吉野の顕彰活動を紹介しました。ここでは、その一部を掲載します。

I部 吉野作造の死

一九二四年（大正十三）、肋膜炎を患ってから吉野は体調不良を訴えることが多くなつた。一九三三年（昭和八）一月十一日、吉野は自ら決意し賛育会病院に入院した。本人



吉野作造葬儀順序

は寒さしのぎ程度にししか考えていなかったが、思いのほか病状は重く、同年三月五日湘南サナトリウムに転院した。しかし、その夜、病院で火事が起こり、厳寒の中、着の身のまま避難した。このことがたたり、同月十八日午後九時三十分頃、家族や友人に看取られながらその生涯を閉じた。

遺体は亡くなったその夜、東京の自宅に戻り納棺、密葬された。葬儀は三月二一日午後一時から青山学院講堂で行われた。巣鴨組合教会野口末彦牧師（第四代本郷教会牧師）の司会のもと、牧野英一の履歴朗読、海老名正、安部磯雄の告別の辞、最後に親

族代表として弟吉野信次が挨拶を述べ午後二時ころ終了した。思想団体や政治団体、マスコミ、芸術家、留学生など多くの人々がその死を悼み、参列者は七百名を超えたという。

II部 現代に生きる吉野作造

戦後に行われた吉野の顕彰活動の中から、東京で結成された吉野博士記念会と故郷古川での活動の様子を紹介。

●吉野博士記念会

一九五〇年（昭和二五）三月、吉野の弟子河村又介と石川清らによって結成された。宮城県出身者、学生時代の友人、東大の同僚、新人会・東大Y.M.C.A・賛育会・社会民衆党・明治文化研究会のメンバーなど、生前の吉野を物語る人びと総勢一六六名が集まった。石川の回想によれば、こ



吉野博士記念会設立総会 1950年(昭和25)4月18日

●古川における顕彰活動

古川では、一九五九年（昭和三四）十二月、有志によって吉野の生誕八十年を記念する講演会が開かれ、これを機に一九六二年（昭和三七）十月「吉野先生を記念する会」が結成された。会では、史料収集や記念碑の建立、また旧古川市図書館内に吉野文庫を設置するなどの事業を展開、顕彰活動を進め現在に至る。

左の写真は、昭和三十年代から四十年代にかけ、当時の陸前古川駅舎線路わきに飾られていた吉野肖像画の原画である。実際に飾られていたものは畳二枚分の大きさで、女優大森暁美氏（古川出身）と剣豪千葉周作の肖像とともに立てられていた。吉野は、戦後まもなくから、郷土の偉人として、認識されていった。



古川駅に飾られていた吉野肖像画（横手広吉作）